

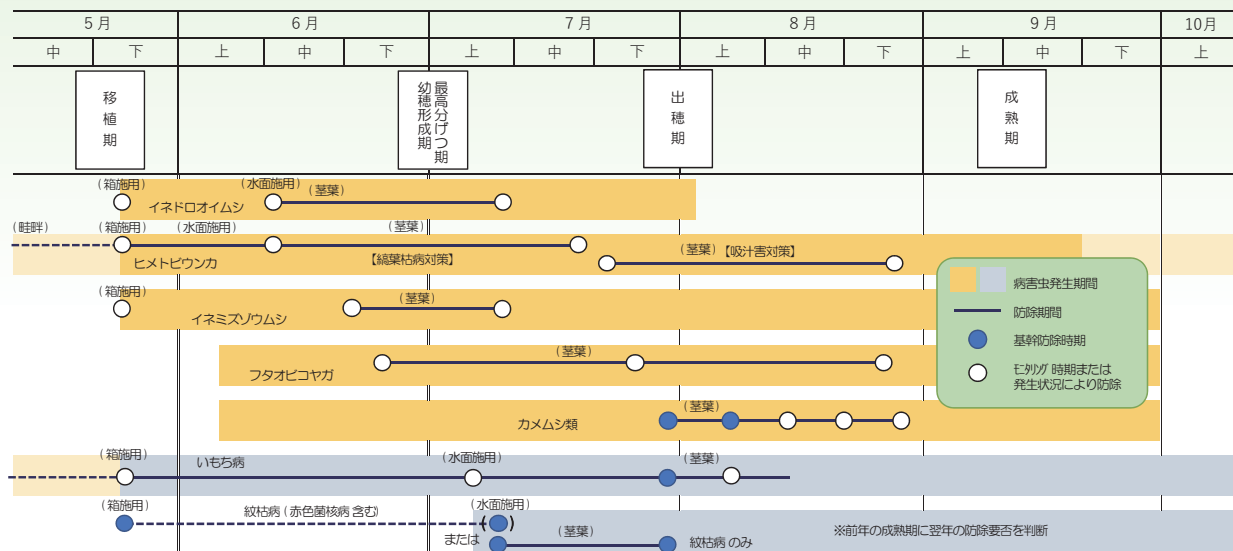


失敗しない 令和4年

水稻病害虫の防除対策



主要な病害虫の発生時期と防除時期の目安



2022年6月

伝染源対策と早期発見でいもち病を抑える

水田周りの清掃を

- 補植用の残り苗は早めに処分しましょう。
- 代かき後にすくい上げた残さ物等のゴミは処分しましょう。

早期発見のコツと適期防除 (図1 参照)

○水田内見回り時期

ブラスタム (BLASTAM, 北海道病害虫防除所) を活用して、効果的に見回しましょう。(http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/)



- 感染好適日の約1週間後が見回り適期
- 好適条件の多い時には間隔を短く
- 葉いもちを発見したら、直ちに茎葉散布

○見回り場所・方法

- いもち病が発生しやすい場所
 - ・前年の発生場所
 - ・葉色が濃い場所
 - ・風通しの悪い場所
- 10mを4か所程度、稲株をかき分け、下葉を重点的に観察

いもち病の薬剤耐性菌に注意

- MBI-D剤は道内各地で耐性菌が確認されています。防除効果が十分に得られていない水田では使用を控えましょう。
- Qol剤 (メトキシアクリレート系剤) 使用の注意事項
 - ①使用は年1回で規定量の処理を行います。
 - ②体系防除は作用性の異なる薬剤と組合せましょう。
 - ③採種圃では使用を控えましょう。

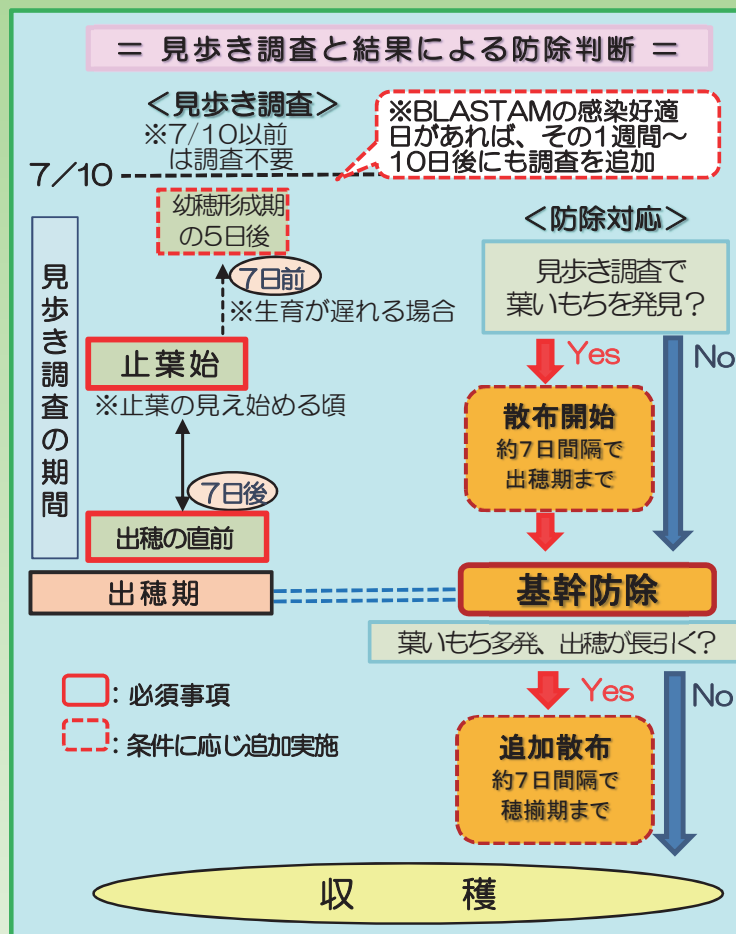


図1 いもち病の見歩き調査と防除体系

イネドロオウムシの防除判断と薬剤選択

○防除要否の判断

1卵塊/株以下の密度では減収とならないので、「北の虫見板」(H10指導参考事項)を活用して防除の要否を判断しましょう。

○薬剤感受性の低下

イネドロオウムシでは、過去に有機リン系、カーバメイト系で薬剤抵抗性個体が確認されており、近年地域によってはネオニコチノイド系及びフィプロニル系剤においても、薬剤感受性の低下が見られています。

○効果的な防除と薬剤選択:

抵抗性個体が確認された地域では、作用性の異なる薬剤によるローテーション防除を実施しましょう。その他の地域では、前年までの防除効果を再検討した上で、薬剤を選択します。

農薬のドリフト防止の留意点

- ①農薬の飛散(ドリフト)防止のため、粉剤の使用を避け、液剤や粒剤などで対応しましょう。
- ②風の条件での散布およびドリフト低減ノズル等の器具の使用を基本としましょう。
- ③周辺に他作物や養蜂場がある場合は、薬剤散布方法・時間帯などについての事前連絡等に配慮しましょう。
- ④農薬の散布はミツバチの活動が盛んな時間帯(午前8時～12時頃)を避け、早朝や夕刻に実施しましょう。

ばか苗病 菌の孢子飛散を防ぐ

- ばか苗病は撲滅が難しい病害です。
- 孢子が遠くまで飛散するため、水稻の種子生産に甚大な影響を及ぼします。
- 採種圃場では、ばか苗病の発生がないことが定められています。

本田での伝染と処理方法

- 本田での症状：発病個体は徒長・黄化し、出穂期頃までに枯死します（表紙写真）。株元には無数の孢子を作ります（写真1）。
- 孢子の飛散：孢子は数百メートル飛散するとされ、出穂・開花期の健全籾に付着すると、その籾は汚染種子として翌年の発生源となります。
- 罹病株の抜き取り・廃棄処理等
 - 出穂までに、枯死前の罹病株を株ごと抜き取りましょう。
 - 疑わしい徒長株・黄変株も抜き取りましょう。
 - 抜き取った株は、圃場外に搬出し土中に埋める等、適切に処分しましょう。



写真1 枯死株に作られた孢子

紋枯病 と 赤色菌核病 の多発に注意

- 近年は紋枯病防除の実施されていない圃場が多く、発生圃場では伝染源の密度が高まっている可能性があります。
- 本年は夏季の高温が予報されており、やや早めの発生と発生量の増加が予想されており、注意が必要です。（R4.3.29 病害虫発生予察情報 長期予報より）

- 紋枯病
高温性の病害で、茎（稈）を枯らします（写真2の①）。茎（稈）にできた菌核（写真2の②）がほ場に残り、翌年の発生源になります。
近年、道内でも発生が増加しています。
- 赤色菌核病
赤色菌核病は紋枯病と類似する病斑ですが、重症株罹病部が枯死し、稈が折損します。
病斑上には黒い菌核は形成されず、収穫時期になると葉鞘の内側にオレンジ色の菌核（写真3の③、④）が形成されます。
近年、道内での発生も目立ちはじめています。

紋枯病・赤色菌核病の防除

前年の成熟期に
防除要否を判断

調査：10株×5ヶ所
（ほ場の縁～内部）
判定：成熟期の発病度40
（＝病斑高率 35%）

成熟期に止葉葉鞘まで紋
枯症状が散見される程度



写真2 紋枯病の病徴と菌核



写真3 葉鞘に形成されたオレンジ色の菌核（赤色菌核病）

- 防除対策の
選 択
(AまたはB)
- A 紋枯病・赤色菌核病の両方に有効**
育苗箱施用剤(略)または水面施用剤(フラメトピル粒剤、シメコナゾール粒剤)を使用
- B 紋枯病には以下も有効**
茎葉散布(無人ヘリ または 地上散布)
薬剤は チアメトキサム・アゾキシストロビン水和剤F またはフルトラニル水和剤F
の効果が高い
散布時期は出穂20日前と出穂期の2回散布

モニタリングを利用した カメムシ 防除

- 「出穂期」と「出穂から7日後」は基幹防除です。基幹防除以降はモニタリング調査により防除の要否を判断しましょう。
- また、水面施用剤や残効の長い成分を含む剤を使用することで、防除回数の削減も期待できます。

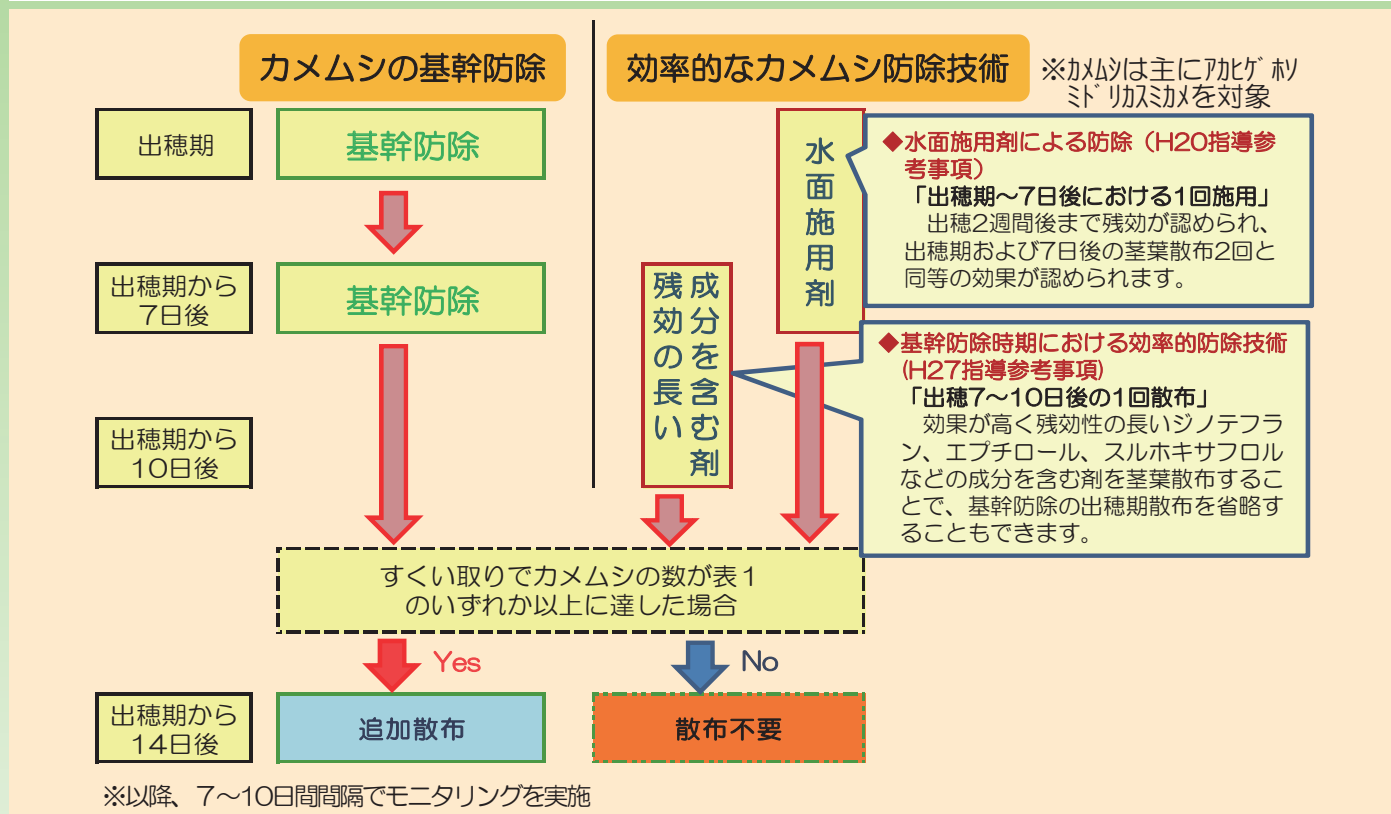


表1 割刈歩合ランクに対応した追加防除の要防除水準

（「R4年度北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」より）

割刈歩合 ランク ¹⁾	主な品種 ²⁾	要防除水準	
		20回振りすくい取り 捕獲虫数	フェロモントラップ 捕獲虫数
少	きたくりん、吟風	3頭	— ³⁾
やや少	ゆめぴりか*	2頭	— ³⁾
中	きらら397	—	2.2頭/7日間
やや多	ななつぼし*	1頭	— ³⁾
多	ぼしのゆめ	—	1.2頭/7日間

注1) R3年度に改定された新たな割刈歩合ランクを示す。

注2) ※は割刈ランクに基づいて当てはめた品種

注3) —はデータが無く要防除水準を設定できない。



写真4 トラップ上のカメムシ

農薬の適正使用の留意点

- ①農薬のラベルには製品名をはじめ、登録番号や有効成分名、製造元、最終有効年月日（使用期限）などが記載されています。
- ②特に、農薬の安全使用に向けては、使用基準や使用方法、注意事項が細かく記載されており、これらは農薬の登録時に行われる作物残留試験結果に基づいた残留農薬基準等を超えないようになっています。
- ③通常散布では登録されていても、有人ヘリコプター、無人ヘリコプター、速度連動式地上液剤少量散布機などの散布方法では、登録の無い場合もありますので、注意しましょう。
- ④散布前は服装、使用器具などの確認・点検を事前に行い、散布時には接触や吸引を回避するよう心掛けましょう。
- ⑤農薬の保管は、直射日光の当たらない涼しい場所に設置された鍵のかかる保管箱又は保管庫で施錠して保管します。特に毒物又は劇薬に指定されている農薬は、容器や包装、保管場所への表示等が法律で定められています。
- ⑥農薬の空容器等は他用途には絶対に使用しないようにしましょう。示されている処理方法にしたがって適正に処理するようにしましょう。